

## 未来に残したい清流川辺川にダムはいらない集会 宣言文(案)

私たち生き物はすべて、山から川そして海へと続く水の流れ(循環)に育まれて命をつないでいます。川の流れは、豊かな生態系を育み、流域の人々の暮らしを支え潤してきました。水の流れが遮られ滞れば、私たち暮らしはもとより、あらゆる生き物が影響を受けます。絶滅の危機に瀕する生き物もいます。

熊本県民が誇る球磨川は、1955年に荒瀬ダムが、1958年には瀬戸石ダムが、1960年には市房ダムが次々に建設されるまでは、春には川面を黒く染め上げるほどの鮎が遡上し、子どもたちも素手で捕まえることができるほど豊かで、ウナギや川ガニもたくさんとれた。初夏には川面一面を照らす蛍が飛び交い夢のようだったと流域の人々は口にします。洪水も起きたが、増水の速度はほぼ予想でき、被害を少なくするための時間は十分にあった、洪水とうまく付き合ってきたと、当時を知る年配の方々は懐かしそうに証言されます。

その豊かな暮らしが、流域にダムが建設されたことによって一変しました。流れが滞ったことで水は濁り、ヘドロのにおいが漂うようになり、鮎もウナギも激減。蛍も姿を消し、漁業には大きな影響がでるようになりました。そのことから1966年に計画された当初の川辺川ダム建設に、住民は40年以上にわたり反対を続けました。その声は当時の蒲島熊本県知事を動かし、2008年ダム計画は白紙撤回となり、国も計画を中止。ダムによらない治水計画の検討が始まりましたが、実際にはほとんど着手されず、治水対策は放置されました。

2018年には、流域の人々の悲願であった荒瀬ダム撤去が完了し、球磨川の水質に改善の兆候が見られるようになりました。しかし、今の球磨川の水質は、球磨川の最大支流であり唯一ダムのない川辺川の清流によって保たれているのが現状です。

そのような中で発生した2020年7月の豪雨被害は、かつてない程深刻なものでした。被災からわずか4か月後の同年11月、蒲島前熊本県知事は、水害被害の検証も不十分なまま、氾濫は球磨川本流ではなく支流から起きたという流域住民の証言や、山の荒廃が被害拡大の大きな原因であるという研究者や住民たちの指摘に耳を傾けることなく、国土交通省に対して、唐突に川辺川上流に流水型のダム建設を要請し、県民を驚かせました。

高さ100メートルを超える巨大ダムが建設されれば、川辺川の清流も「尺鮎」に代表される豊かな生態系も、五木村や相良村の美しい自然景観も永遠に失われることは必至です。2008年のダム白紙撤回以降、ダムなしでの村づくりを進めてきた五木村の人々は再び振り回され、戸惑い、怒りを覚えています。

豪雨災害の被災者も、ダムを望んではいません。美しく豊かな川とともに長く暮らしてきた人びとは、今回の災害はダムを作っても防げず、国が豪雨災害をダム推進のための口実に利用していることを知っています。ダム満水時の緊急放流におびえる住民も少なくありません。「ダムはいらない。造ってほしくない」。これが住民の願いです。

また、「ダムで濁りは発生しない、鮎に影響は無い」とする国の環境アセスを誰も信用してはいません。すでに浚渫や関連工事による濁りのため、痩せて泥臭い鮎しか取れなくなり、取引を断られ、川漁師さんたちの収入は激減しています。

ダムでは命も清流も、自然に恵まれた豊かな暮らしも守ることはできません。

私たちは、熊本県知事に対し、2020年豪雨災害の検証を、住民とともにゼロから行うこと、流域の人々に向き合い、その声に真摯に耳を傾けることを要望します。

今日ここに集う私たちの願いは、「未来に残すべきは川辺川の清流」であることを改めて確認し、「ダムはいらない！」の声をダム計画が撤回されるまで国と県に届け続けることを宣言します。

2024年7月7日

未来に残したい清流川辺川にダムはいらないパレード・集会参加者一同